

## 『社会資本論』から学ぶ

写真は宮本憲一先生の『社会資本論』。自宅の書棚に5冊も並んでいる。左は1967年に刊行された初版、その次が1976年に刊行された改訂版。右端は1997年刊行の改訂版「復刻版」。あと2冊は古本屋で仕入れたものだ。こんなに書棚に並んでいるのは、私の人生を左右した本だからだ。復刻版『社会資本論（改訂版）』の復刻にあたって」を抜粋して紹介したい。



社会資本は経済発展や国民生活にとって、なくてはならぬストックである。社会資本の多くは機械・設備のような民間資本や食料・衣料のような生活物資と違い、公共性をもち市場経済の外部性とされ、経済学の対象としては十分な解明をされていなかった。しかし、道路や港湾なくしては企業の発展はなく、都市社会においては、上下水道や公園などのライフライン（生命線）がなくては生きていけぬことは阪神大震災などで明らかであろう。近年における東アジアの急成長は、鉄道と教育という社会資本の整備の所産といってよい。また世界1、2位の所得水準に達した日本の市民が豊かさが実感できないのは、社会資本の不足による都市問題や過疎問題によっている。資本主義の外部性とみられてきた社会資本が、実は経済成長とその質をきめる要件なのである。こんごの地球環境の維持可能な発展(Sustainable Development)も社会資本のあり方によって決定されるといってよい。

本書は日本における最初の体系的な社会資本論として、いまから30年前に出版された。その後、教科書として普及させるために、日本の社会資本の歴史の部分を省略し、石油ショック前後の転換期の問題をつけ加えて、1976年に改訂して再版された。復刻版はこの改訂版によっている。

30年前には類書がなかっただけに、方法論の上で苦闘をした。本書では社会資本を経済体制をこえて、歴史貫通的に素材（質料）的規定からはいっている。そこでは社会資本を社会的一般労働手段と社会的共同消費手段にわけて、生産や生活における素材の性格を明らかにしている。その上で、資本主義的生産過程や都市的生活様式における体制的規定をし、さらに日本社会の独自の性格をのべている。このような方法論は初版当時には珍しく、教条主義的なマルクス経済学者などの批判をあびた。しかし、その後の世界経済の動態や経済学の発展の中で、私の方法論は広義の経済学では当然のこととされるようになった。とくに都留重人先生が『公害の政治経済学』（岩波書店、1972年）において、私と同じように公害問題を素材から体制へという方法論で解明されたことによって一般的となったといってよい。

(2019年12月19日)